



## 誰もが命を輝かせる自己決定の夏休み

校長 可知 浩幸

明日から36日間の夏休みが始まります。学校では、4月から一貫して、生徒達が「自分で考え、判断し、行動する自律した人間」になるために、自己肯定感(やればできる)と自己有用感(任せとけ)を高める支援をしてきました。その際、「～しなさい」「～してはダメ」という自律を奪う言葉は使わないように気を付けてきました。夏休みもそのスタンスを変えることなく、今年は、一研究一作品を自由課題とし、読書感想文や人権作文等は授業で扱うことにするなど、自主学習も含めて一律に義務付ける宿題をなくしました。テーマは「誰もが命を輝かせる自己決定の夏休み」です。この自己決定の重要性について、千代田区立麴町中学校の元校長で横浜創英中学・高等学校の工藤勇一校長が、著書「自律する子の育て方」(SB新書)の中で、以下のように語っています。

### 子どもに自己決定を促す「3つの言葉」

安心できる環境をつくることと、ストレスに強い脳をつくるのが同時にできる、魔法のような言葉があります。麴町中では「3つの言葉がけ」と呼んでおり、子どもに何かトラブルが起きたとき、全教員がその対応方法の指針としているものです。(中略)

1. 「どうしたの?」(「なにか困ったことはあるの?」)
2. 「きみはどうしたいの?」(「これからどうしようと考えているの?」)
3. 「何を支援してほしいの?」(「先生に何か支援できることはある?」)

これは、全国の学校や家庭、職場ですぐに使うことができます。(中略)

第1の言葉がけの「どうしたの?」で、子どもの置かれている状態を言語化してもらいます。メタ認知に必要な自分の内面に意識を向ける訓練にもなる言葉であると同時に、子どもが何をしても頭ごなしで叱らない、ことがポイントです。

第2の言葉がけの「どうしたいの?」で、子どもの意思を確認します。自分の置かれた状態を解決するための方法を、頭の中で考えてもらうためのきっかけづくりです。

第3の言葉がけの「先生にできることはある?」で、問題解決の手助けをします。実際には大人から選択肢を与える形になることが多いですが、どんな支援を受けるのか、もしくはそもそも手助けを受けないのかを判断するのは子どもです。同時に、教員がサポートをする意思を表明することで子どもも「先生は味方である」と認識するようになり、それがさらなる心理的安全性に寄与します。(中略)

これは、子育てでも大事なことですが、親が口や手を過剰に出すことなく、常に子どもに自己決定の機会を与えていくと自己肯定感が高まり、自ずと自信と主体性がついてきます。なぜなら、自己肯定感とは、「自分は自分のままでいいんだ」という自分にOKを出す感覚だからです。

自己決定させることはどんな小さなことでも構いません。とにかく、子どもでも決められるにもかかわらず、大人が勝手に決めてしまうことが子どもの自信と主体性を奪っていると、まずは理解しないといけません。(中略)

ポイントとしては「子どもを頭ごなしに叱らない」とことと「子どもに決めさせる」という2本柱を同時に実現していることでしょう。「叱らない」だけだと学校は野放図になるだけですし、子どもに決めさせてもそれを大人が毎回批判していれば、決めることが嫌になります。この2本柱が同時にあることで、「あ、この学校は失敗しても大丈夫なんだ。やり直せばいいんだ。いろいろなことにチャレンジできるんだ。」という安心感が生まれるのです。

生徒達は、この夏休みをどんな36日間にするのかを考え、計画を立てました。一人一人が自己決定を繰り返し、自分の「やりたい」をたくさん実現させる「誰もが命を輝かせる自己決定の夏休み」にしてほしいと願っています。そうするには、大人の支援が必要です。保護者、地域の皆様にも、どうか「3つの言葉がけ」で生徒達を支えてくださいますようお願いいたします。